

お母さんたちの涙に、あなたは何を思いますか？

先日、ある地方都市の発達障害児関係の親御さんと支援者グループの勉強会で講話する機会を得た。

レジメに厚かましく当 HP のサイトアドレスを記載していたからか、あるお母さんから次のような初メールが届いた。

【 本日、特別支援教育講座に参加したものです。参加して良かった 本当にありがとうございました。帰りの車の中で、何がなんだか分からないけど、涙があふれ出てきて・・・ 真夏の夕立のようでした。何をどうしたらよいか？ これでいいのだろうか？ 間違ったのではないか？ 子供たちの寝顔や笑顔を見ると、いたたまれなくなる時がありました。こんな思いがあったので、お話を聞いて、ほっと背中に背負っているものが軽くなつたのでしょうか？ 帰宅後すぐに、メールを 思っておりましたが、泣き疲れたのでしょうか ……。 今日のお話 本当に ありがとうございました。 】

また、講話中にハンカチで目を拭う数人のお母さんの姿も目にした。

こうしたお母さんたちがいたことを親しい友人に話したら、「きっと 阿部さんのお話に 通じるところあり 感動されたのでしょうね。」と云ってくれた。

むしろ、私の話に感激の涙というより、恐らくお母さんたちは、障害児の母親という緊張からのストレスを抱いて過ごしている日々故の涙でないだろうかと思う。

そう思うと、お母さんたちの涙は、我々（社会）の障害児とその家族への真の支援の至らなさと、また、母親の心情に寄り添い続ける支援のあり方の必要性を訴える無言の叫びでないかと、私には思えた。

講話の中でも紹介したが、ある母親からの次のメッセージを、改めてしっかりと受け止めたいと思っている。

「専門家は、指導や助言以上に、親の不安感を取り除いてください。親にエネルギーをいっぱい与えてください。そうすれば親子で前向きに生きていく勇気が生まれます。それは、障害を治すことと同じくらい、いえ、それ以上にありがたいことです。」

あなたご自身は、日頃こうしたお母さんたちの涙に、何を感じ、お思いになっているのか、お聞かせいただければと思います。

(2006年7月16日 記)